ウォルター・スコットの「視覚イメージ」

佐　藤　猛　郎

1・0

ウォルター・スコット（1771－1832）の文学の特徴のひとつとして，「絵画性」を指摘する人が多いが，今回の小論では，この「絵画性」を少し拡大して，ウォルター・スコットの「視覚イメージ」について調べてみたいと思う。「絵画性」というと，どうしても，実際に絵画として描かれたものとの関連でとらえることが多いと思うが，ウォルター・スコットの場合，実際に絵画として定着する以前の，漠然としたイメージ，動きを伴った情景，といったものと深くかかわりあっているので，「視覚イメージ」という言葉が，それをいちばん適切に表しているように思われるからだ。

1・1

スコットは大作「マーミオン」（1808）を発表して，詩人としての地位を確かにした頃，彼のそれまでの半生を振り返り，彼が文学者として成功するまでの，いわば修行時代の記録を残している。スコットは，これを彼の死後発表するつもりで，どこにも発表せずに置いたようだ。彼の死後，娘婿のJ．G．ロックハート（1794－1854）は，傑作とされる「スコット伝」（1838）執筆に当たり，義父のこの手記を，彼の伝記の冒頭に，第1章として載せた。このため，この貴重な記録は，今日でも，我々が目にすることが出来るようになったわけだ。

スコットのこの手記に，彼が初めて自然の美しさ，その視覚的美しさに目覚めた頃の記録がある。彼が病気療養のため，国境地方のケルソーに住む叔母の家に滞在していた当時だから，彼が十二，三歳頃の話だ。当時のスコットは，東西の文学を次から次へと乱読していて，シェイクスピア，スペンサー，オシアン，などを読みふけり，パーシーのバラッドによって，古い民謡への興味をかき立てられていた。

「またこの時期に，自然の美しさを見る喜びが目覚めたのを，私ははっきりと思い出すことが出来るが，この気持ちは，その後私から消えることはなかった。ケルソーの周辺は，スコットランドで一番ロマンティックとは言えないまでも，一番美しい田舎町で，こういった気持ちを抱かせるにはうってつけだった。そこには，それ自身雄大であるばかりでなく，その連想から，畏敬の念を起こさせるようなところがいくつもあった。

（中略）

これはペンよりも絵筆で説明するのに，向いているかもしれない。私の心を支配しているロマ

ンティックな感情は，当然のことだが，私の周りの雄大な風景によって刺激されたものであり，それに深く結び付いたものだった。そしてそれら風景の多くに関わりのある歴史的な事件や，伝承伝説の類を知っているため，私の感嘆の情には，一種の強い畏敬に似た気持ちが加わり，ときどき私はこの胸に，切ないほどの感動を感ずるのだった。この時から，自然の美しさ，もっと厳密に言うと，古い廃虚や，私達の祖先の信仰や栄光を偲ばせる遺跡と結び付いた自然の美しさを愛する気持ちは，私にとって飽くことを知らない執念となってしまい，これを満足させるためなら，事情さえ許せば，私は地球を半周する旅にだって喜んで出たいと思っている」[1]

ここで，彼が，彼に感動をを与える風景や，自然の美しさは，「ペンよりは画筆で描かれるのに適している」と考えていたということは，注目する必要がある。彼が風景などの描写をする際に，まず目標として，絵画を念頭に置いていたらしいことが想像できるからだ。

次に，彼にさらに深い感動を与えるには，単なる風景では十分でなく，その土地柄や風景にまつわる歴史，伝説，民謡の類が，その風景によって連想されることが必要だ，という部分も注目に値する。そういった過去の記憶が「視覚イメージ」に結び付くとき，スコットに胸がいっぱいになるほどの感動を与えたのであろう。

さて，これほど絵画性を求め，絵画に憧れたスコットだったが，彼に画家の資質はあったのだろうか。上に引用した彼の手記に，次の一節がある。これは上の引用より少し後で，十五，六歳頃の記録だ。

「美しい風景を全体として眺めるのを，私ほど好んでいる人は少ないのではないかと私は思う。しかし私には，画家の目をもって風景の各部分を分析し，その一つが他の部分にどのように影響を及ぼしているかを理解し，風景の様々な特徴が，全体としてすぐれた効果を生み出すために，どのように作用しているかを判断する，などという芸当は出来なかった。

（中略）

私に感動を与えた場所を，せめてスケッチでもできたら，と私が長年抱いていたささやかな望みも，目に欠陥があったものか，それとも手が駄目だったものか，まったくの徒労に終わってしまった。長い間勉強もし，努力を重ねたのだけれど，目の前の風景に遠近法を適用することが出来ず，陰影をつけることも出来ないという始末で，私は，あれほど習いたくてならなかった芸術を，絶望の中に諦めなくてはならなかった。だが，私の目の前に，古い城とか，古戦場を見せてもらいたいものだ。そうすれば，たちまち私は自信を取り戻し，その場面に，往時の武装に身を固めた勇士達を数多く配備してみせるとともに，情熱のこもった戦いの描写で，聞き手を驚嘆させることが出来た」[2]

同じ半生記の中で，スコットは自分に音楽の才能がないこと，また踊りの才能もないことを告白しているが，彼には画家の才能もなかったらしい。天は二物を与えず，というところだろうか。

しかし，画筆を手にした画家にはなれなかったスコットだが，彼の目は，明かに目の前の風景，

情景の中に，絵画を見ている。しかし多くの場合，彼の目に見えているのは，単なる静止画ではない。そこに登場する人物像が，実際に動き回り，活躍する「視覚イメージ」なのだ。その「視覚イメージ」を文学の形式で表現したのがスコット文学だと言うことも出来るならば，彼の作品の各所に，絵画的情景が見られるのも当然だろう。

スコットが彼の処女長編詩「最後の吟遊詩人の歌」（1805）を出版したとき，当時の英国首相ウィリアム・ピット（1759－1806）はこの詩を愛唱し，そのいくつかの行を，周りの人々によく朗読して聞かせたとのことだが，彼がいちばん気に入っているところは，老吟遊詩人が歌を所望されて，ためらうくだりで，「これは絵の題材にふさわしいものなのに，詩に歌われるとは思いもよらなかった」と，彼がある人に言ったと伝えられている[3]。このことから，スコットの詩行を読んでいて，ピットは明かに絵画的イメージを見ていることが分かる。話題になっているのは，次に引用する部分だ。

And much he wished, yet feared, to try
The long-forgotten melody.
Amid the strings his fingers strayed,
And an uncertain warbling made —
And oft he shook his hoary head.
But when he caught the measure wild,
The old man raised his face, and smiled;
And lightened up his faded eye
With all a poet's ecstasy!
In varying cadence, soft or strong,
He swept the sounding chords along:
The present scene, the future lot,
His toils, his wants, were all forgot;
Cold diffidence, and age's frost,
In the full tide of song were lost.
Each blank, in faithless memory void,
The poet's glowing thought supplied;
And, while his harp responsive rung,
'Twas thus the LATEST MINSTREL sung. (*The Lay of the Last Minstrel,* Introduction)
「彼は長く忘れられていたその調べを
ぜひ歌いたかったが，しかし，不安も大きかった。
竪琴の弦の間を彼の指はさまよい，
そして，不安げな楽音が響いた—

そして，幾度となく，彼は白髪頭を横に振った。
しかし，かの荒々しい調べを想い起こしたとき，
老人は顔を上げ，微笑みを浮かべた。
そして，彼の衰えかけた眼は
まさに詩人の興奮で輝きわたった！
弱く，あるいは強く，響きを変化させながら，
彼は次々に和音を変えて弾き続けた。
眼の前の光景，未来の運命，彼の苦しい生活，
彼の貧窮，それらはすべて忘れ去られてしまった。
冷たい不安感，老齢ゆえの気弱さ，
これらもほとばしり出る歌の流れの中に消えてしまった。
心もとない記憶力が残した空白は，
詩人の燃える思いがこれを満たした。
そして，竪琴の高鳴る響きに合わせて，
最後の吟遊詩人は次のように歌った」

これは，スコットが頭の中に描いた「視覚イメージ」が，彼の詩行の中に躍動し，「言葉による絵画」，「ペンによる絵画」として，一部の読者には，「視覚イメージ」の形で受け入れられていたことを示すよい例ではないだろうか。

1・2

スコットの文学とと彼の「視覚イメージ」との関係についてだが，自伝的要素が強い彼の小説第1作，「ウェイヴァリー」(1814) を読むと，彼の分身とみられるエドワード・ウェイヴァリーの少年時代の描写に，興味ある一節がある。どうやらここにスコットの「視覚イメージ」の原点がありそうに思われる。

エドワード少年は，伯父のエヴェラード卿や叔母のレイチェルから，ウェイヴァリー家の祖先にまつわる物語を聞くのを好んでいた。祖先の一人，十字軍の遠征に参加したウィリバート・オヴ・ウェイヴァリーは，聖地での戦いで死んだと報じられていた。彼の婚約者は，彼の遠征中，彼女を何くれとなく護ってくれた勇士と，結婚することになっていた。ところがその結婚当日，騎士ウェイヴァリーが帰国して，姿を現したことから，大騒ぎになる。しかし，騎士は周りの人々からその事情を聞いて，自らの権利を放棄し，若い二人を祝福して，自らは修道院に入って世を捨ててしまう。もう一つのお気に入りの話は，クロムウェルの内戦時代の祖先，アリス・ウェイヴァリー卿夫人の物語で，ウッドストックの戦いに敗れたチャールズ2世が，ウェイヴァリー館に身を隠したときの話だ。追手の騎馬隊の駒音が聞こえる中で，彼女は末の息子に，僅かばかりの使用人を率いて，王が逃れる時間を稼ぐため，決死の抵抗をするよう命ずる。追手は瀕死の青年を引きずってきて，母親の前に投げ出す。しかし，彼の命がけの抵抗が，その目的を達したことを，母親の眼に見て取

った息子の表情には，安堵の色が浮かんでいた。この青年にも婚約者がいた。彼女は彼に貞節を尽くして，その後誰とも結婚しなかった。長い病で，死期を察したとき，彼女は死ぬ前にもう一度ウェイヴァリー館を訪れ，愛する人の血が染み込んだ床の見納めをしたのだった。

From such legends our hero would steal away to indulge the fancies they excited. In the corner of the large and sombre library, with no other light than was afforded by the decaying brands on its ponderous and ample hearth, he would exercise for hours that internal sorcery, by which past or imaginary events are presented in action, as it were, to the eye of the muser.

(*Waverley,* Chap. 4)

「そのような物語を聞いた後で，我らが主人公は，それら物語がかき立てた空想に浸るため，その場を離れるのだった。広い，薄暗い図書室の片隅で，重厚で広い暖炉の中で消えかかっている薪の明りしかないようなところで，彼は何時間も，空想の魔法に身を委ねる。その魔法の手にかかると，過去の出来事や，想像上の出来事が，まるで実際に生きて動いているように，空想家の眼に浮かんでくるのだ」

今までも，何度か指摘してきたように，スコットにおける詩的感興，文学性というものは，「眼に浮かぶもの」つまり「視覚イメージ」として捉えられていることを，この1節も示しているように思われる。スコットにあっては，しばしば自分を“muser”あるいは“dreamer”と称していたことも考慮に入れる必要があるかも知れない。つまり自分の想像力を働かして，彼は心の中にある心象を描く。実際の絵画ではないが，空想による絵画がそこに映し出され，その視覚イメージが彼の文学の源泉となっているのだ。

2・1

ウォルター・スコットが彼の文学を構築するに当たり，まず彼の頭の中には「視覚イメージ」が存在していたこと，つまり，ある種の絵を彼が思い描いていたことは理解できるが，実際にどのようなイメージを彼が思い描いていたかは，時代も環境も違うところで生活している私達には，あまりよく分からない。ただ彼が当時流行していた絵画を大変好み，それをときどき彼の作品の中で比喩的に使っていることから，彼が抱いていた「視覚イメージ」の実体を，おぼろげながら知ることが出来る。

先に引用した「ウェイヴァリー」に，次のような一節がある。

The principal inhabitant of this singular mansion, attended by Evan Dhu, as master of the ceremonies, came forward to meet his guest, totally different in appearance and manner from what his imagination had anticipated. The profession which he followed — the wilderness in which he dwelt — the wild warrior-forms that surrounded him, were all calculated to inspire terror. From such accompaniments, Waverley prepared himself to meet a stern, gigantic,

ferocious figure, such as *Salvator* would have chosen to be the central object of a group of banditti. (Chap. 17)

「この風変りな屋敷の主人は，案内役としてエヴァンドゥを従えて，客人を出迎えに進みでたが，彼が想像していたところとは，外見上も，立居振舞いも，まったく違っていた。彼の生業，彼が住んでいる荒野，彼を取り巻く，武装した恐ろしげな男達，それらすべては恐怖の念を抱かせるものだった。このようなものに囲まれているのだから，サルヴァトールが山賊群像の中心人物として描くような，けわしい表情をした，凶悪な大男と出会うものと，ウェイヴァリーは予想していたのだ」

ここにサルヴァトールとあるのは，イタリア人の画家，サルヴァトール・ロウザ（Salvator Rosa 1615－1673）のことで，サルヴァトールは物淋しい夜景，特に月光に照らされた古城や，焚火を囲んだ山賊の群れなどを好んで描いた画家である。18世紀後半の，いわゆる「ピクチャレスク」趣味にもてはやされ，当時の人気画家の一人だった。いまでは，彼の画風に接することはなかなか出来ないが，ロンドンのナショナル・ギャラリーに2点ほど展示されているし，ケンブリッジのフィッツウィリアム博物館にも，二，三，所蔵されているという。67頁の写真はナショナル・ギャラリー所蔵のものだ。

スコットはこの他，何回かサルヴァトールに言及しているし，彼自身当時の流行に決して無関心ではなかったので，彼の絵がスコットの「視覚イメージ」の中で，かなり重要な関係を持っていたことは間違いない。

つぎに，スコットがいわゆるロマンティックな風景を描写するときに，言及する画家がいる。次の引用も，スコットのロマンティシズム追求と深い関わりがある「ウェイヴァリー」からの1節である。

The borders of this romantic reservoir corresponded in beauty; but it was beauty of a stern and commanding cast, as if in the act of expanding into grandeur. Mossy banks of truf were broken and interrupted by huge fragments of rock, and decorated with trees and shrubs, some of which had been planted under the direction of Flora, but so cautiously, that they added to the grace, without diminishing the romantic wildness of the scene.

Here, like one of those lovely forms which decorate the landscapes of *Poussin,* Waverley found Flora gazing on the water-fall. (Chap. 22)

「このロマンティックな深淵の周囲も同じように美しかった。しかし，それは厳しく威圧するような種類の美しさで，荘厳さに近いと言ってもよかった。苔と芝草に覆われた岸は，所々崩れかけて，巨大な岩がむき出しになり，潅木や低木がその風景を飾っていた。この中のいくつかはフローラの指示で植えられたものだが，この風景のロマンティックな荒涼とした感じを失うことなしに，風情を加えるよう，注意が払われていた。

ここで，ウェイヴァリーは，プーサンの風景画を飾る美しい人物さながらに，フローラが滝を

見おろしているのに気づいた」

ここで言及されているプーサンは，フランスの画家，ニコラ・プーサン（Nicholas Poussin 1594－1665）で，プーサンははじめ，聖書やギリシャ・ローマ神話を題材とした人物画の劇的瞬間を，主に描いていたが，後に，遠近法を駆使し，美しい，あるいは雄大な自然の風景に，人物を配する独特の画法を確立した。上記のサルヴァトール同様，彼もまた「ピクチャレスク趣味」を追求する18世紀の文人や画家に愛好され，スコットが生きていた当時の文芸思潮に，大きな影響を与えていた。

プーサンの絵は，現在でも高く評価され，欧米ばかりでなく，わが国においても，画集が何種類か出版されているから，それを参考にすれば，スコットが，実際に頭に描いていた風景画がどのようなものだったか，その一端を垣間見ることができる。67頁に示してあるのが，プーサンの風景画だが，いずれも前景に大きな木立を配し，その近くに古典的な人物画描かれ，遠景には，険しい山並や，遠くに見える城などが描かれているのが特徴になっている。

これ以外に，スコットがしばしば言及する画家には，ルーベンス，ホガース，レイノルズなどがいるが，当時の新進画家，ターナーにも彼は関心を寄せ，1828年に出た「ウェイヴァリー小説全集」の挿絵は，ターナーに依頼されている。

3・1　スコットの「視覚イメージ」の特徴

スコットの「視覚イメージ」について，色々探ってきたが，彼の文学作品の中に描き出された「視覚イメージ」は，彼個人の想像力が生み出したものだから，彼独特の偏りがある。これはごく普通のことで，詩人，文学者等，誰をとっても，それぞれ異なる心的世界をもっている。スコットの場合，他のロマン派詩人に比べると，その心的世界はかなり常識的だと言っても差し支えあるまい。それでも，スコット独特のイメージが印象的に映ることもある。例を挙げると，恐ろしい戦争のシーンのひとこまを，別の日常的なイメージに置き換えて，さらりと叙述する詩行などもその一つで，それを読むと，非常に新鮮な魅力が感じられる。林立する勇士達の槍を野原一面に広がる麦の穂に例えたり，必死に相争う両軍の戦いぶりを，吹きすさぶ木枯しに舞い踊る枯葉の群に例えたりしているのも印象的だが，ここでは，襲いかかった大軍が退いて行く様を，津波に例え，敗軍の兵が消える様を，春の淡雪に例えた１節を紹介しよう。

Then skilful Surrey's sage commands
Led back from strife his shatter'd bands;
　And from the charge they drew,
As mountain-waves, from wasted lands,
　Sweep back to ocean blue.
Then did their loss his foeman know;
Their King, their Lords, their mightiest low,
They melted from the field as snow,

When streams are swoln and south winds blow,
　Dissolves in silent dew. (*Marmion*, 6, xxxiv)
「そこで戦い上手のサリーは賢明な命令を下し，
戦いに疲れた各隊を，戦線から退かせた。
そこで攻撃の手を休めて，引き上げる大軍の様は，
あたかも大津波が，踏みにじった土地をまた通って，
青い大海に向け，いっせいに退いて行くかのようだった。
やがて彼の敵軍は，自ら被った損失の大きさを知った。
彼らの王，貴族達，最も勇敢な戦士が倒れた今となっては，
小川の水かさが増え，南風が吹き始めると，
静かに溶けて，露になってしまう雪のように，
彼らは荒れ野から消えていった」

これはジェイムズ４世が率いるスコットランド軍が，フロドンの戦い（1513）で，イングランド軍に壊滅的な敗北を喫した事件を扱った１節で，スコットの長編詩第２作，「マーミオン」（1808）第６曲から引用している。スコットランド側の戦死者は，王を含めて１万余，イングランド軍でも，戦死者２千人を数える，実に血生臭い戦いの記録なのだが，これを津波と雪解けという自然現象のイメージに描いているのには，はっとさせるほどの新鮮さがある。

筆者は1992年８月にこの古戦場を訪れたが，そこは黄金色に実った一面の麦畑で，長閑な田園風景が広がり，血生臭い往時を偲ばせるものは，そこが古戦場だということを示す記念碑だけだった。スコット自身も，200年ほど前，恐らくそこを何度か訪れたはずだが，彼が見た景色も，筆者が見たものと大差はなかったろう。とすると，彼がこの古戦場に立って，思い描いた「視覚イメージ」は，現実の戦いの生々しい残虐さを排除した，まさに彼の詩行に歌われているままだったのではないだろうか。彼は過去の凄惨な戦いを，一種の美化された絵巻物として，つまり，あくまでも現実とは別個の「視覚イメージ」として，捉えていたのかもしれない。

３・２　スコット作品の絵画性とドラマ性

スコット文学の絵画性をこれまで論じてきたが，彼が描く「視覚イメージ」は，単なる静止画ではなく，そこに動きを伴った映像だったということも，理解できたことと思う。動きのある絵画と言えば，これは当然ドラマに通じる。彼は創作にあたって，ドラマ性というものも，つねに追求していたはずだ。

スコットの名作小説の一つに，「ラマムアの花嫁」（*The Bride of Lammermoor* 1819）があるが，その第１章に，架空の作者クレイシュボーサムが，これまた架空の画家ディック・ティントーと，絵画的小説論を展開しているところがある。クレイシュボーサムは，劇作品と同じように，登場人物の発言，台詞によってドラマを構築すべきだ，と主張する。平板な説明文や，解説文の連続では，ドラマは盛り上がらないと言うのである。事実，スコットの小説作品には，物語の展開や発展を，

説明文抜きで登場人物の発言に委ねることが多く，そういった重要な発言がスコットランド方言でなされることがあるので，その方言を知らないと，時には物語の流れについて行けないことがある。

ティントーはこれに反論して，「ふた言」もあれば，すぐ説明がつく状況を，えんえんと登場人物の対話で説明しようとされては，せっかくのドラマの盛り上がりが損なわれるではないか。登場人物の緊張感を巧みに描いた絵画が，一瞬の中にその場のドラマ性を理解させることが出来るように，的確で，力強い描写力で，ある劇的場面を叙述することができれば，だらだらと台詞を重ねるよりも，遥かにその場面の劇的効果を高めることができるはずだ，と主張する。

最後に，クレイシュボーサムは，この作品に関しては，出来るだけティントーの意見を入れて，対話よりは描写に力を入れてみたが，昔の古い癖が出て，ことによると会話部分が顔をだすかもしれないが，そこのところは平にご容赦をこう，と言ってこの第１章を結んでいる。

クレイシュボーサムはスコットの分身だから，スコット自身，彼が描く「視覚イメージ」に，劇的緊張感を与えようとしていたことを示す一節である。彼が目指すこのドラマ性が，実は，当時の人々に強いインスピレーションを与えていたのだった。

３・３　スコット文学のドラマ性の影響

スコットの文学ドラマ性が一番大きな影響を与えたのは，歌劇の世界で，ロッシーニ，ドニゼッティといった巨匠達が，次々に，スコットの「湖上の美人」，「ラマムアの花嫁」，「アイヴァンホー」といった作品をオペラ化したが，今回の小論は，絵画の面を中心としているので，後年の画家に与えた影響を見てみよう。

スコット文学にその霊感を得た画家は，何と言ってもフランス・ロマン派の巨匠ドラクロア（Eugène Delacroix 1798-1863）で，68頁に紹介されているように，スコットの作品から，スケッチ風の「ラマムアの花嫁」による連作，「クエンティン・ダワード」（1823）をもとにした「ブルージュ司教の処刑」，「アイヴァンホー」（1820）をもとにした「レベッカの誘拐」などを発表している。

スコットの作品を題材にしたものばかりでなく，ドラクロアの芸術の特徴は，「狂えるメディア」などに見ることができるようにある劇的な瞬間における，高揚した人物像や人物の表情を力強く描くところにあるので，これは文学において，スコットが目指した劇的な「視覚イメージ」と共通するところが多かったと思われる。ともあれ，ドラクロアのような巨匠の出現に寄与したことを考えても，彼の「視覚イメージ」が持つ意義は，けっして無視は出来ないのである。

（この小論は，筆者が1994年７月２日，大阪府立労働センターで開かれた日本カレドニア学会，第81回大会において口頭発表した内容をもとにまとめたものである）

（さとう・たけろう　産業情報学科）

注

（1） J. G. Lockhart, 1902 (1839 edition), *Memoirs of Sir Walter Scott* (10 vol.), Constable, I, p. 40–1

（2） *Ibid.* I, p. 53

（3） *Ibid.* II, p. 194–5

The Visual Aspects of Walter Scott

Takero Sato

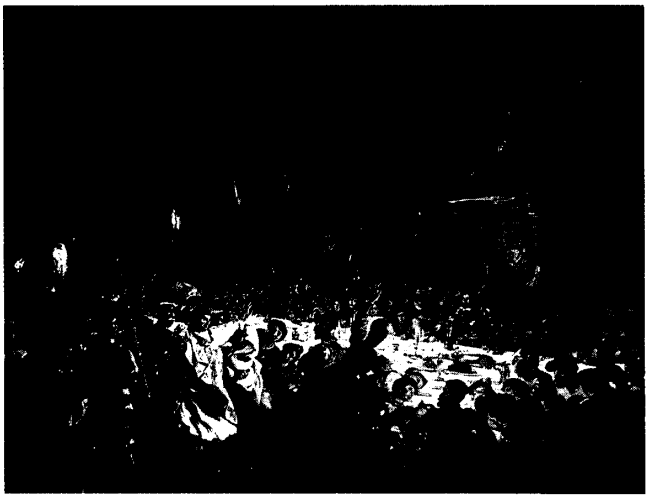
In this paper, I tried to trace the birth, the growth, and the developments of Walter Scott's consciousness as to the visual world and its images. While I was writing this, I referred to various aspects of visual images with which his inner self was closely connected in the course of his life as a writer. Lastly, I briefly touched on the influence of Scott's dramatic visual world on a Romantic painter Eugène Delacroix.

Key words: Walter Scott, visual images, Salvator Rosa, Nicholas Poussin, Eugene Delacroix

魔女の呪文（部分）サルバトールロウザ

ディアナとオリオンのいる風景　ニコラ・プーサン

蛇のいる風景（恐怖の効果）ニコラ・プーサン



ブルージュの司教の処刑（「クェンティン・ダワード」より）
ユージン・ドラクロワ

「ラマムアの花嫁」より
ユージン・ドラクロワ

レベッカ略奪（「アイバンホウ」より）
ユージン・ドラクロワ